

乗り鉄少年の自立

両親が相談に来られたのは相談記録を見ると、彼が中学校3年の8月25日だった。

小さい頃、30数個のご当地ぬいぐるみを大事にする、大人しく几帳面で優しい子だった。

3年保育も行き渋りは、学期の初めだけで殆どなかったと言う。

九州出身の父親に対しては素直な態度を示すが、愛知県出身の母親に対しては思春期ゆえか、時折反抗的な態度を取る。母親の弟（彼の叔父）が自閉症だと言う。2歳上の高校生の姉がいる。友達のように仲がいい。祖母は7年前（当時）にすい臓がんで死去。祖父は妻（彼の祖母）の死を受け入れられず、1年前（当時）に自死。白内障の手術を受けたが、緑内障を見逃し、視力を失っていたと言う。

小学校高学年になっても友達が殆どいなく、学校が嫌だと言うようになった。得意科目は社会で、乗り鉄少年だけに特に地理は得意。計算のスピードが遅く数学は、英語と共に苦手。基本的に勉強は嫌いと言う。後に、翌月初めの学力調査の結果を聞くに納得する。

中学校2年の11月の金曜日、40代の女性教諭の担任（50代の母親とダブルのか）に、提出物を（やってあったが）持つて来なかつたことと、ボールペンで書く書類を鉛筆で書いたことを強く咎められ、その翌週の月曜日から不登校に、（確か唯一できた近所の友達と同じテニス部だった）部活も行けなくなつたと言う。両親は、勉強と部活にいっぱいになつて疲れてしまったと思うと言う。中3になった今はその女性教諭は隣のクラスの担任で、男性教諭が担任である。

依頼を受け心理テストの結果を見るに、感性（感情の発露）17（100点中、以下同じ）、知性（客観視、論理性）20、父性（学校に行くという行動のコントロール）32、母性（世話好き優しさ）60、順応性（周りの目を気にする）がMAXの100。不登校の自分をみんな自分をヘンな子だと思っていると思い込み、自分の感情を抑え込み、登校するという自分の行動をコントロールできない。且つ、そんな自分を俯瞰できない状態である。

29日、本人と会った。約1時間彼と話し合つた。中3のこの時期だけに、高校進学の彼の意思を確かめるため、彼の夢を聴いた。「乗り鉄」と自称する彼は、父親と祖父の影響で所謂「鉄道マニア」、父親や祖父と一緒に全国の鉄道を尋ね、あちこちに行つたと言う。高校生になつたらまだ乗つたことのない鉄道に乗り、その鉄道の写真を撮りSNSで紹介し、その地の美味しい食べ物を食べたり、お土産を買ってその地域を応援したい、と生き生きした顔で語つた。単なる回顧主義だけではなく、中学生ながら地方活性化の策を志向する彼の意欲を感じた。その時初めて「乗り鉄」の意味を知つた。両親から大人しいと聞いていた彼だけに、能弁に語る彼に驚いた。

「だったら、明日朝からこの予備校（東進中学N E T 藤枝駅南口校）に来て、夕方まで勉強しよう。その君の高校進学を叶えてやる。」と、私は豪語してしまつた。再度申し上げるが、中3の8月29日まで10か月の間、不登校のままの彼である。当然に彼は学校では、普通高校進学は無理、通信制高校か実務専修学校進学の話を聞いているはずである。しかし私

は一方で、某私立高校校長に電話して、夢ある彼の入学試験受験を打診していた。

翌日朝、彼は私の運営する予備校に来た。苦手克服のための教科学習に加えて、再登校に向けて彼の週3回のカウンセリングと、両親の週1回のペアレントトレーニングを開始した。勿論、その彼の毎日の当予備校への出席は、彼の中学校の出席認定を受けた。両親から勉強嫌いと聞いたが、意外に熱心に勉強に打ち込んだ。勿論、分からぬところは再度東進の授業を受けたり、私に聞きに来る。東進の毎回の確認テストも80%以上合格で学力も付けてきた。

そして、10月に入った。このまま不登校では勿論、義務教育ではない高校は学習意欲無しと判断し、受け入れをしない。そのことを十分に彼に伝えてあった。そのためその日予備校に来た早々、彼からもう中学校に行きたいと言ってきた。勿論、これまでのカウンセリングはそれを意図してきた。でも、11ヶ月も学校に行っていない、いきなり一人で再登校は無理である。通常私はこうした場合、翌日2日間の緊張感緩和の休養が取れる、金曜日の再登校を勧める。そうなると金曜日は3日後だった。慌ただしく再登校の準備に入った。

私たちはこうした不登校生の対応に入ると、本人と保護者の了解の元当該学校に出向き、不登校に至る当人の心理分析を伝え、今後の対応の内容と方針（再登校の段取りも含めて）を説明しておく。勿論、対応中も適時当人の様子は当該学校に伝える。従って、学校も慌てることなく対応に応じてくれる。

前日木曜日の放課後、明日金曜日の時間割の確認と、友達に明日の登校同行を依頼するため、彼が望む友達との面談を、その日昼当該学校に電話で依頼した。翌日、唯一の友達のU君の面談同席の同意が得られた、との電話が入った。確認のためその電話をお借りして、担任の先生に明日の面談の流れを再確認し、簡単に打ち合わせをさせて頂いた。

翌3日木曜日の放課後、当該中学校で彼とU君を交えての面談が行われ、その場で彼はU君に誘われ、一緒に教室の自分の席の確認を行った。その時、U君から周りの席の友達の説明を受けたと言う。戻ってきた彼の表情は緩んでおり、明日の再登校を確信した。

対応して僅かに1ヶ月余の10月4日、彼は再登校を果たした。勿論、私たちの対応はその後も当校予備校生として高校受験まで続いた。11月彼と両親は、私が紹介した某私立高校の進学相談会に参加し、本人ともどもその私立高校が気に入った。某私立高校も進学意欲を感じ取り、私の元に受験受け入れを連絡して來た。結果、某私立高校入試にも合格したが、彼は静岡中央高校単位制課程にも合格し、進学した。ここに彼から頂いた、彼が静岡中央高校入試でプレゼンした「自己表現」の原稿のコピーがある。A4、4枚の原稿である。そこには、はつきりと彼の不登校からの自立の経緯が描かれている。全文を掲載したいが、彼が特定されるので、差し控える。そこには、彼の父親と自死した彼の祖父から受け継いだ想いが息づいている。

その後、彼は大学の観光学部に進学し旅行会社に勤めたとの話を、偶然街でお会いした父親から聞いた。